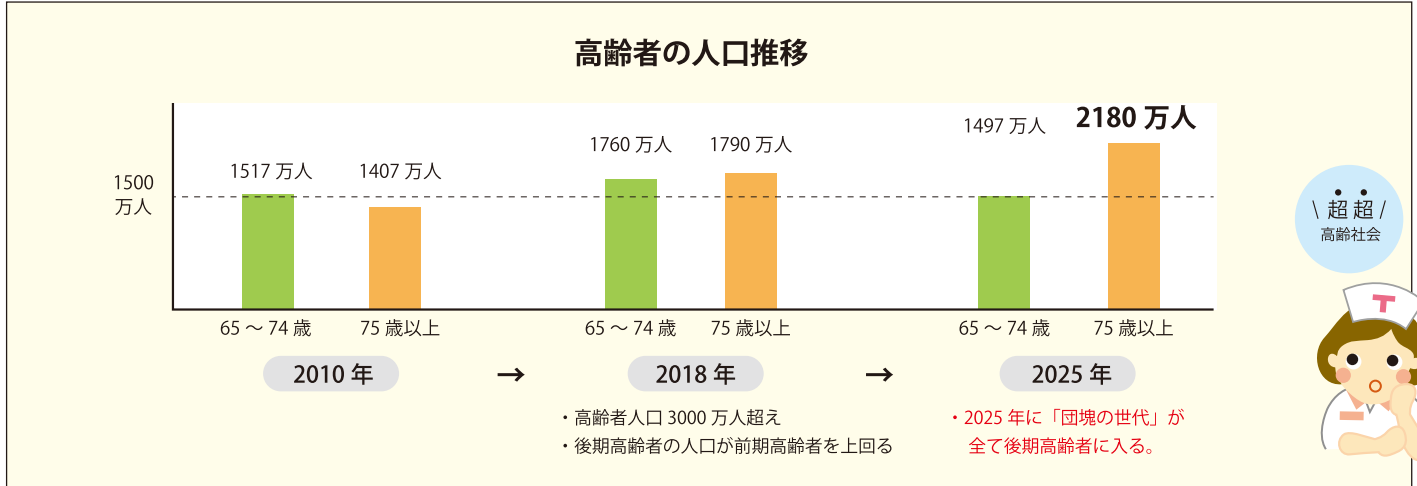


今月のテーマ

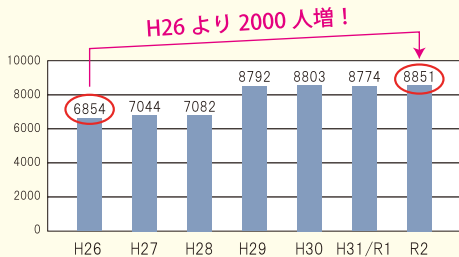
病院や高齢者施設で離床センサーの導入が進む理由

転倒・転落事故の背景

日本の高齢者人口は 3,000 万人を超え、現在およそ約 3 人に 1 人が 65 歳以上の高齢者となり、高齢者の人口割合が世界 1 位となりました。更に、2025 年には「団塊の世代」にあてはまる全ての人々が後期高齢者（75 歳以上）に入り、必然的に入院患者も高齢化が一気に進みます。これにより、医療現場での高齢入院患者に対する医療安全対策がより一層求められます。



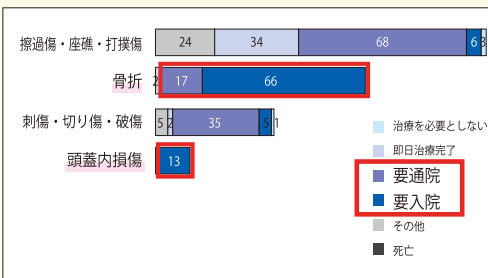
65 歳以上の転倒・転落事故 死亡者数 (表 1)



令和 2 年 住宅内でおきた
高齢者の転倒・転落事故の内容 (表 2)

1 位	80 歳以上	同一平面上的転倒	958 名
2 位	65～79 歳	同一平面上的転倒	370 名
3 位	80 歳以上	階段などからの転倒及び転落	201 名
4 位	65～79 歳	階段などからの転倒及び転倒	149 名

住宅内発生 299 件の内症状別・処置見込み別件数 (表 3)



資料：消費者庁及び厚生労働省

高齢者の転倒・転落事故について

厚生労働省発表の、医療機関から寄せられた住宅内で起きた転倒・転落事故の症状は、擦過傷が多く、次いで骨折、頭蓋骨内損傷という重症例も目立ち、入院率も高くなっています。

2020 年の転倒・転落事故による全国の死亡者数は 8851 人となり、6 年前の 2014 年から 2000 人増加しています。(表 1) その中の転倒・転落事故の内容について、80 歳以上の同一平面上的でのスリップ・つまずき等は顕著に多く、高齢者がいかに転倒しやすいかということを表しています。(表 2)

また、住宅で発生した転倒・転落事故の内容をしてみると、骨折が 2 番目に多く、また、処置後も通院または入院する例があり、転倒・転落事故が、高齢者のその後の生活にも大きく影響することが分かります。(表 3)

転倒・転落事故は社会問題

東京都病院経営本部が発表した都立病院におけるインシデント・アクシデント・レポートの中で、医療事故における転倒・転落事故の割合は 2013～2022 年の平均が 15% でほぼ横ばいとなっています。転倒・転落に関して病院や施設で対策を行っても、高齢入院患者が増えているため追いつかない状況であることが見てとれます。

また、転倒・転落は医療提供側のミスというより、患者の自発的な行動によって起きる患者要因の影響が強いことも増加の原因に挙げられます。

転倒・転落リスクが高い患者へ排泄時のナースコール指導をしても、「排泄だけは自力で…」という気持ちからコールに頼らずに行動した結果、転倒してしまうケースもあります。また、患者自信の「したい行動」と「できる行動」にギャップがあり、そのことが転倒・転落に結びつくことも多いようです。事故を防ぐ手段として、患者が不用意に動かないようにすることが挙げられますが、「自分で動きたい」という行動を抑制・拘束することは人間の尊厳を傷つけるだけではなく、身体機能を低下させるなど高齢者の生活の質を損なう危険性が指摘されており、

いかに患者の行動を抑制せず、転倒・転落を減らせるかが鍵となります。

離床センサーによる転倒・転落対策

〈離床センサーの役割〉

看護師は、患者の療養生活のサポートだけでなく、診療・治療の補助、看護記録や物品管理などたくさんの仕事を毎日こなしています。しかし、転倒・転落は患者が自由に行動する限りいつでも起こりうるので、患者のケアをしている時でも、巡回しているときでも、常に複数の患者の転倒・転落リスクを考えて仕事をしなければいけません。

「患者の行動を知らせる『モノ』があれば看護師も楽だろうなあ…」入院中の創業者がそんな想いから開発したものがテクノスジャパンの離床センサーです。

「離床センサー」は、患者さんの特定行動を看護師さんにお知らせすることはもちろんですが、患者さんの予想外の動きや癖に気づいたり看護師さんの業務を支援する道具でもあります。また、患者さんにとっては、「拘束・抑制」されない自由と安全な療養環境をサポートする役割を担います。

患者さんには **安全** を！

療養環境サポート

- ・行動が抑制されない自由
- ・気づかない所で、見守りケアを受けられる安心



看護師さんには **安心** を！

業務支援の道具

- ・動きを検知し転倒・転落を直前に防止
- ・予想していなかった行動を発見
- ・危険予知の向上
- ・精神的緊張の緩和


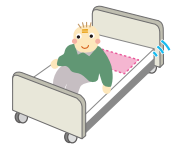



〈離床センサーを効果的に使うためには〉

離床センサーは、必要な患者さんに適合した離床センサーを正しく使用したときに、最大の効果を発揮します！

センサーの有用性

= 「製品」 + 「使い方」 + 「適合」 の総合点



対象者の行動	知りたいタイミング	適合するセンサー
<ul style="list-style-type: none"> ・ひとりで行動すると転倒の危険性がある ・徘徊行動がある 	立ち上がり	 コールマット
<ul style="list-style-type: none"> ・自立歩行が困難 (ベッドからの利用が転倒に繋がる恐れ) ・床に足を着く前に介助が必要 	起き上がり	 ベッドコール
<ul style="list-style-type: none"> ・床敷きのセンサーを避ける ・床敷きセンサーでは報知タイミングが遅い 	端座位になろうとする時	 サイドコール
<ul style="list-style-type: none"> ・サイドレールを抜いたり、飛び越えたりしてしまう ・サイドレールを握り起き上がる、立ち上がる 	起き上がり 立ち上がり	 タッチコール
<ul style="list-style-type: none"> ・特殊なマットレスを使用している ・床次式のセンサーを飛び越える、気にする 	設置場所によりタイミングを選べる 立ち上がり、起き上がり、歩きはじめなど	 超音波・赤外線コール

その他たくさんのラインナップがございます！